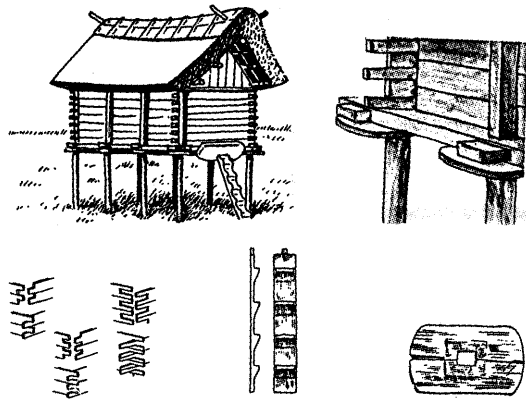


んだスポンジだという地形環境のおかげで、いったん森林が切り開かれても何十年か過ぎれば、以前の樹種・植生とは異なるかもしれないが、新しい二次林が生育してくる場合が多くなりました。人口集落の後背丘陵地のカシやシイなどの照葉樹の森は破壊されても、そのあとにナラ、クヌギ、ブナなどの落葉広葉樹やアカマツの林が再び生育し、人々に薪やキノコ、木の実、動物などの採集地を与えてくれました。



A 板校倉の組方 (推定) B 梯子(はしご) C ねずみ返し

高床式倉庫(ねずみ返しのある倉庫)
(学研「日本の歴史」、上村著「木とくらし」より)

女王・卑弥呼と紙の関係

ちょうど、その時代の大家ヒロイン・邪馬台国の女王・卑弥呼が魏に使いを送って、金印や友好の親書を授けられています(A. D. 239年)。

中国では、三国志の時代も終りに近づいており三国志の要で、中国史の知性派英雄として永遠に名をとどめる諸葛孔明が没してから4年後のことでした。

当時の倭国は、30ほどのクニにわかれていましたが、この中でとくに勢力の強いクニが邪馬台国で、他のクニをしたがえていました。シャーマニズム(鬼道)をよくする坐女の女王卑弥呼は人前に姿を見せず、木の柵をめぐらした大きなやしきに住み、千人もの女のめし使いを使い、やしきのまわりは男の兵士に守らせていました。

ところで現在、紙は広く、使われている木の利用のひとつとなっていますが、日本人がはじめて紙の実物を見たのは、卑弥呼あての魏王の親書ではなかったかといわれています(寿岳著「和紙の旅」より)。

中国で紙がはじめて発明(A. D. 105年蔡倫による)されたころは、古い綿を原料としていました。あとになるとコウゾや麻の皮などで、植物繊維をパルプ化する方法が考え出されましたが、卑弥呼が見た紙はまだ古い綿からつくられたものでした。

紙をはじめて見た古代の人々は、どんなに驚き感心したことでしょう。しかし、その便利さは知ったものの、作り方まではわかりません。やっと日本で紙が作られたのは、それから400年ぐらいあ

とのことでした。この長い間、紙は貴重な輸入品だったのです。

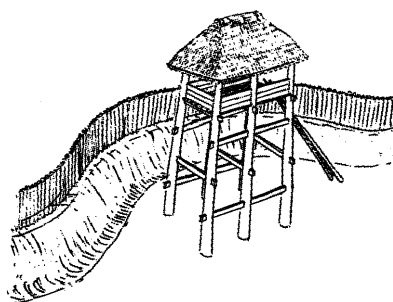
それでは、紙のない時代には何に文字をしるしたのでしょうか。大昔の人たちも、やはり木簡(木の板)や竹簡(竹を割ったもの)に書きました。いらなくなると、それを削って、また書きました。

ちなみに、紙は後漢の時代、洛陽に都があったころの発明といわれています。蔡倫という宦官が紙漉きの方法を開発し、時の皇帝に献じたというのが定説となっています。といっても、紙を漉く技術はそれ以前からあったようで、前漢武帝の時代の遺跡から、紙が見い出されています。蔡倫の発明というのは、墨書きできるような紙質の改良と量産技術の向上に努めたということのようです。

日本では、601年に、朝鮮半島の高句麗の僧・曇徴が帰化し、紙・墨・絵の具の作り方を伝えたのが、その始まりといわれています。

神話のなかの“木の利用”

さて、神話にスサノオノミコト(A. D. 2~3世紀?)が、出雲の国のヤマタノオロチという大蛇を退治するお話があります。この大蛇の背中にはマツとかカシワ、わき腹にはヒノキとスギが生えていたということで、これは当時の山林の姿



物見やぐら
(集英社「imidas」より)

をあらわしたものです。つまり、頭が8つに分かれた大蛇は、八方に広がった山脈の姿をしめし、これが暴れるということは、木が倒れたあとに洪水が起こったことをしめし、これを退治したスサノオノミコトは、山に木を植えて洪水を治めたりっばな人だったというわけです。出雲の山々は、鉄の産地としてにぎわい、その燃料に山の木々が多くきられていたのです。

また、神話は別のところで、スサノオノミコトがスギとクスノキで船をつくれ、ヒノキで神社・宮殿をつくれ、マキでお棺をつくれといったと、伝えられています。それに、スサノオノミコトには、イソタケルノミコトという、子どもの神さまがありました。この神さまは、天からたくさんの木だねを持って、日本に降りてきました。そして九州から植えはじめ、日本中に植えていきました。おかげで、日本の国はいつも青々と樹がしげっているのです。

熊野詣で有名な紀伊の国(木の国:和歌山県)の熊野本宮には、スサノオノミコトがまつられています。古くから、お参りの人たちが、苗木をお供えするしきたりがありました。いかだ流しでにぎわった熊野川の木材も、そんな古い信仰と結びついて、育てられたものでした。

このように、私たちの祖先は、森を育て、木を上手に使ってきました。木を上手に使うことは、水を上手に使ってお米をつくると同じように、昔

から、私たちの生活につながってきた重要なことです。

日本は、お米の国、森の国、そして木の国なのです。

おわりに

今日、地球規模での環境破壊が世界の関心をあつめるなかで、森林を養うことの大切さの理解が高まってきています。失った自然の恩恵の大きさに気づき、森と木と人の関係をより深く知ろうとするあらわれでしょう。

歴史をひもとけば、紀元前・数千年前に栄えたメソポタミアにせよ、インダス、黄河、エジプトにせよ、人類最古の文明は、森林の荒廃とともに滅んだことを伝えています。

なぜか?一つには、森や木のもつ数々の恵みを吸いとって行く過程、そのプロセス自体が文明の歴史であったからです。つまり、水の助けにさええられながら、農業を営むための森林の開発、エネルギー源としての薪炭材の採取、都市を建設するための用材の採材、.....これらの行為をぬきにしては文明は成り立ちえないし、人々はみな、このことによって生きながらえてきたのです。古代文明も、ギリシャ・ローマの地中海文明も、そのふるさとやはり森林だったのです。

「文明の前に森林あり、文明の後に砂漠がある」とか、「森林を求めて文明が移動していく」といわれるゆえんです。また、「20世紀は機械文明の時代だが、21世紀は生物文明に移る」という意見もあります。みな、それぞれ味わい深い言葉だと思います。

豊かな日々をすごしているような感じのする昨今、後世に永く残しておくべきものは何かをみつげ出すためにも、時には、「自然と人」のかかわり合い、そのなかでも、「森と木と人」のかかわり合いに想いをめぐらしてみたいものです。

(鎌田 昭吉)